

3.1 朝鮮独立 107 年企画

海に沈んだ長生炭鉱の遺骨、 日本社会の責任を問う

山本みはぎ

「韓国併合」100年東海行動は、毎年「3.1 朝鮮独立運動」の日に、企画を行ってきたが、今年は「海に沈んだ長生炭鉱の遺骨、日本社会の責任を問う」をテーマに、「長生炭鉱の水非常を歴史に刻む会」（以下刻む会）の代表の井上洋子さんをお呼びしての講演を予定していた。しかし、2月7日の「長生炭鉱水没事故 84 周年犠牲者追悼集会」と同時に行われた遺骨収集の潜水で、台湾人ダイバーのウェイ・スーさんが潜水中に亡くなるという大変痛ましい事故が起きたことから延期し、当日は、2月7日に行われた慰霊祭の記録ダイジェストで放映し、名



古屋から当日参加して当会メンバーからの報告に変更をして企画を行った。

長生炭鉱の歴史と遺骨収集の経緯

長生炭鉱は、山口県宇部市床波の沖合にあった海底炭鉱で、1932年にアジア太平洋戦争遂行のために創業された国策会社。海底という劣悪な環境で、朝鮮半島出身者が多く働かされた。1942年2月3日、坑口から1.1キロの沖合で天井が崩落、朝鮮人136名を含む183名が犠牲になった。事故直後に「二次被害を防ぐ」という名目で坑口が塞がれ、犠牲者はそのまま冷たい海底に放置された。

1991年1月①犠牲者の全員の名前を刻んだ追悼碑の建立、②ピーヤ（排気坑）の保存、③遺族、生存者の証言の聞き取り、真相解明を目的に刻む会が発足し、同年8月、「長生炭鉱犠牲者大韓民国遺族会」が結成された。2013年2月「長生炭鉱水没事故犠牲者追悼碑」建立されたが、遺族から「これで終わりではなく、遺骨発掘が最大の願いだ」と言われたことを機に、翌年から遺骨収容のための坑口探しと、政府交渉が開始された。

2023年12月に水中探検家の伊佐治佳孝さんから協力の申し出があり、2024年7月から潜水調査を開始、2024年9月25日には坑口が発見された。その後、坑道の障害物除去など行い、2025年8月

の潜水で人骨4点を発見し、2026年2月にも頭蓋骨と全身遺骨が発見されている。

2023年からは国会で遺骨返還問題が取り上げられたが、政府は「遺骨のある場所が明らかではない」と消極的でその後も国は動かなかった。2026年1月の日韓首脳会談で遺骨のDNA鑑定を推進することで合意し、翌1月には厚生労働省は専門家を同行し、現地視察と刻む会のメンバーやダイバーとの意見交換が行われたが、その後具体的には進展をしていない。

2月7日の慰霊祭と今後

2月7日の慰霊祭は刻む会の井上代表の挨拶から始まり、韓国の遺族会の楊玄会長や日本の遺族からの挨拶があった。来賓として大韓民国行政安全部、駐広島大韓民国総領事、韓日議員連盟の関洪キル幹事長などの挨拶があったが、日本政府は「参列はおろか弔電も花1本送られてこなかった」（司会の言葉）。慰霊祭の途中で事故の一報があり午後の行事は中止された。

翌日、刻む会の井上さんや伊佐治さんの記者会見が行われた。井上代表からは、ダイバーの遺族への対応を最優先するとしうえて、「遺骨収容と返還の願いが消えることはないと思っているが、どう続けるのかは検討したい」と発言があった。伊佐治さんからは「僕のやっていることに協力することがうれしいと来てくれていた」「僕たちは何が起こっても自分のせいだと思って潜っている。刻む会やご遺族、日本政府のせいでもない。彼は誇りを持って潜水する選択をしたと思う」と声を詰まらせて話された。

ウェイ・スーさんのご遺族の方からは、スーさんがこの地を訪れた理由が「多くの人の力になりたい」という強い思いからで、刻む会に対し、「2人目の犠牲者が出ないように、安心・安全を保全した上で、こういった活動は有意義なので、ぜひ活動を継続してほしい」という思いも伝えられた。

82年前の長生炭鉱の事故は、石炭増産を国策として進め、危険な労働に従事させた国や企業の責任が問われなければならない。日本政府は、韓国遺族会の楊会長の、「市民団体がやるには限界があることはわかっているはずで、それを黙ってみているのは道理ではない。遺族の願いは日本政府が遺骨収容に取り組むことだ」という言葉に植民地支配の負の歴史の責任として真摯に向き合わなければならない。長生炭鉱での活動が再開された暁には、井上さんをお呼びして講演会を企画したい。